



市民が主役のまちづくり

「長崎伝習所」は、長崎の中でも全国に誇れる事業のひとつです。その中心にあるのは、「主役は市民だ」という考え方です。「市民が主役になるまちづくり」そのようなまちほど暮らしやすく、元気がよくて、明るくて、笑顔が溢れる魅力的なまちだと思います。「長崎伝習所」は、そのような魅力的なまちづくりの仕組みを作っていこうということで昭和61年にスタートしました。

今年度までの23年の間に、223の塾が活動を展開し、塾の卒業生は延べ7,977名に達しております。その方々は、卒業後も、愛して止まない長崎のまちをもっと良くしたいという気概のもと、まさに「市民力」を発揮されて、長崎のまちづくりに各分野で活躍を続けておられます。

今、まさに市民の皆様の手でつくるまちづくりが大事な時代に来ており、今年は大河ドラマ「龍馬伝」に向けて「長崎さるく幕末編」がスタートするほか、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」と「九州・山口の近代化産業遺産群」という世界遺産候補を二つも持つまちになりました。

しかし、市民の皆様がその価値を知って大事にしようという思いがなければ、世界遺産にはなれないと思いますし、世界遺産になっても価値がないものだと思います。これからも、市民の皆様と一緒に長崎の価値を見つけ、磨いていきたいと考えております。

今後とも、長崎のまちが輝き続けていくために、市民の皆様と行政が協働して魅力的なまちづくりに向けての研究を重ねてまいりたいと思いますので、これからも伝習所活動に積極的にご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、塾長をはじめ塾生の皆様のご努力と、お忙しいなかご指導いただきました運営委員の皆様、伝習所活動にご協力いただいた関係の皆様に対しまして、心から厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月 長崎伝習所総長 田上 富久

運営委員からのメッセージ



●運営委員 座長

佐藤 秀人

長崎伝習所、只今変身中。

長崎伝習所は、生まれてから 23 年が経ちました。素晴らしい歴史の積み重ねとともに、マンネリをとこところに感じるようになりました。立ち上げ当時の「ワクワク感」「ドキドキ感」が希薄になり、いつのまにか「前例踏襲」の活動を続ける塾が増えてしまいました。

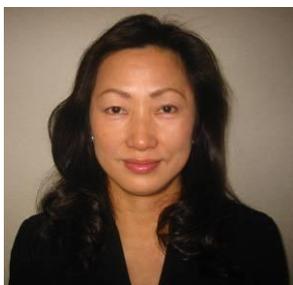
そんな時、伝習所の事務局が「市民協働推進室」に変わりました。名前の通り、市民のために力を合わせて頑張るメンバーがそろっていました。事務局の熱意に打たれ、私たち運営委員も変わりました。何度も、「伝習所はどうあるべきか」という議論を繰り返しました。その上で、伝習所立ち上げ当時の市役所職員や過去の塾長経験者や過去の運営委員にも、意見を伺いました。

その結果、「伝習所は、塾長が塾生に何かを教え

る組織ではなく、一緒に考え、行動する組織である。」とか、「伝習所は、ワクワク感が大切である。いつもワクワクして参加したくなる塾が理想である。」とか、「伝習所の塾は、一つぐらい東京にあって、東京から長崎に向けて発信する塾があってもいいのではないか。」などの貴重な意見をいただきました。

今、その貴重な意見を参考として、伝習所は少しずつ変わり始めました。たとえば、「今年度の伝習所まつりは、現在の塾メンバーが実行委員となり、自ら手づくりで開催すること」「早速、来年度から東京塾を開催すること」「観る・聴く・創る “湧く沸くながさき” というキャッチフレーズをつくり、主体的に参加する塾をイメージしたこと」「denden という伝習所のキャラクターを創って、毎日長崎新聞第二面に登場させて、驚き感を演出していること」などです。

伝習所は、只今変身中です。一緒に伝習所に参加して、一緒にワクワクしながら、伝習所の変化を楽しんでいきましょう。そして、伝習所の「長崎を愛する思い」を愉快地に引き継いでいきましょう。



●運営委員

糸屋 悦子

長崎伝習所が 20 周年を迎えてから、はや 2 年。

20 周年を転機に、もう一度伝習所活動を原点に戻って考えようと、運営委員会でも様々な意見交換をしてきました。その結果、長崎伝習所は着実に新たな一歩を踏み出しているような気がします。

「CM 伝塾」の塾活動で、今までにはなかった各

塾間の交流が出てきたのは、ほんとうに喜ばしいことです。この交流で新たなネットワークができ、長崎伝習所がますます活性化していく…これこそ、まさに伝習所活動の醍醐味です。

田上総長が「長崎化」という言葉を長崎のキーワードにされていますが、まさにこの長崎化を市民と行政の力で継続してきたのが長崎伝習所だと思います。

「denden」という摩訶不思議な新しいキャラクターも生まれ、魅力ある長崎のまちを作っていくために、これからの塾の活動がますます期待されるところです。



●運営委員

大田 由紀

「面白がりましょう」

12月上野発の夜行列車で青森に向かい、八甲田山麓の酸ヶ湯温泉に泊ったのは、「津軽海峡冬景色」が大ヒットし、映画「八甲田山」が話題になった年です。酸ヶ湯温泉は映画のロケ隊の宿泊場にもなった湯治場でした。当時5人以上のメンバーが揃え

ば、社員旅行として認められ、わずかな補助金が出ていたのです。まわりは驚いたり、呆れたり。旅行の発案は、上司で多くのドキュメンタリーを制作した大先輩でした。彼は涼しい顔で「面白がるのが大事なんだよ。」その後、放送番組の制作に携わった私はこの言葉を肝に銘じてきました。

長崎にも足跡を残した高杉晋作は辞世の句で「面白きことなき世を面白く」と読んでおります。

「長崎伝習所」の基本は面白がること！「面白がって」たくさんの「面白い」ことに会いましょう。



●運営委員

株元 隆

私は、長崎経済研究所（十八銀行グループ）で財団法人十八銀行社会開発振興基金の事務局を担当しています。この基金は、長崎県内における教育・科学・文化などの振興を図るために必要な助成を行い、社会開発に貢献することを目的に設立されました。

今年度も7団体に総額で370万円の助成を行いました。驚くことにこの7団体のうち2団体が、この長崎伝習所の「塾」として活動を開始されたということです。

この2団体は、平成11年度の「長崎くんち塾」

と平成14年度の「河川環境研究塾」（助成団体名は「ながさきホテルの会」）で、地道な活動を継続し地域社会の発展に貢献していることが認められ選考されました。

長崎伝習所の「塾」としてスタートした両団体が今なお活動を継続し、伝統芸能の保存や環境保全のため真剣に取り組んでおられることに感動いたしましたし、またその活動のお役に立てたことを幸せに思っております。

しかし、両団体への助成で痛感したことは、こうした活動を継続していくためには、“資金”が必要であるということです。今後伝習所では、こうした長崎の活性化のために活動を継続している「塾」への資金面等のサポート体制についても、検討する時期に来ているのではないかと考えます。



●運営委員

森永 春乃

先日、伝習所まつりに参加して塾生の熱い思いを感じました。

自分の好きなことを通じて多くのことや多くの

人とのかかわりを大事にして、さらにそれを何とか社会に還元していこうという思いです。成果はどれもすばらしいものですし、プレゼンテーションでは、わからなかった深い内容も見えてきました。

この成果をまつり以外でもっと多くの人に広めたり、知らしめる方法を探たらいいのではないのでしょうか。



●運営委員

山崎 加代子

2009年3月7日(土)「長崎伝習所まつり」無事終わりましたね～。

今年は、初めての試みとして実行委員会形式でチャレンジ。会場は、観光通りと、諏訪小学校に分かれて開催。いままで屋内でやっていたこのおまつりを、外に出して正解だったと思います。

関係者だけではなく、通行人の方たちが何だろう？と思って、立ち止まってくれる、聴いてくれる、見てくれる、アンケートに答えてくれる。これはやはり屋外の強みでしょう。

諏訪小学校は屋内でしたが、それなりに賑わいを見せていました。

でもできたら、来年は観光通り1カ所で集中してやってみませんか？

今回初めてのやり方で当日いろいろ問題はあったようですが、せっかく熱い思いの運営委員・事務局員もば～んと勢揃い中！今年よりも来年がもっと良くなりそうな気がします。

「楽しまなければ、伝習所ではない」を合い言葉に、まずは塾生が楽しんで・・・。

ところで、楽しいことをもうひとつ。

「dendenくん」という長崎伝習所・新キャラを、佐藤座長中心に、運営委員・事務局員の方たちとワイワイガヤガヤ考えました。

長崎新聞で、今年の1月1日から1日1コマ、100日間「まいにちdenden」という小粋パラパラ漫画も掲載しています。長崎伝習所という名前がほとんど出てこないことで、読者のアンテナに妙にひっかかってくれば成功、くらいの謙虚な思い(?)で始めました。

かわいいパラパラアニメも制作しました。なかなか楽しい展開です。

これからゆっくり、dendenグッズを作る予定です。ので、乞うご期待。

みなさん、いいアイデアがありましたら、お声かけてくださいね～。デンデン。

長崎伝習所 Nagasaki Denshusho

長崎には、「このまちをもっとよくしたい!」「大好きな長崎のために何かやりたい!」という熱い思いや、「こんなことをやったらいい!」というユニークな発想を持つ市民の方が大勢います。そのような市民の皆さんのエネルギーと自由な発想こそが、魅力的な長崎を創りあげる原動力となります。

長崎伝習所は、そのような熱意とアイデアを持つ人々や、それに共鳴する人々が集まり、協力して活動できる場となります。テーマごとに市民の皆さんが「塾」を設置し、塾生を募集して、塾長を中心に市民と行政が協働で「塾」事業を展開しています。



denden

長崎伝習所の目的

長崎伝習所は、市民と行政が有機的に連携することにより、人材の育成・ネットワークづくりと政策を生み出す活動を行い、地域の活性化と発展に寄与することを目的としています。名称の由来は、幕末期に長崎に設置された「海軍伝習所」や「医学伝習所」などからきているもので、その輝かしい歴史に学ぼうという意味が込められています。

設立からの経緯

長崎伝習所は、昭和61年に人材のネットワークづくりと地域の活性化を目的に、異業種交流の場として、海洋開発、都市デザイン、バイオテクノロジーなどをテーマに「塾」が設置され、しだいに長崎の再生を模索する幅広い活動の場となってきました。

昭和63年の「ふるさと創生1億円」を基に、平成元年度に「長崎伝習所基金」を創設し、市民と行政が有機的連携を強化することにより、人材の育成と政策を生み出す活動を行い、もって長崎の再生と創造に寄与することを目的とする「長崎伝習所」の活動に充てています。

設立以来、長崎を魅力ある元気なまちにするために、市民と行政が力を合わせて研究活動を行い、平成20年度末までに223の塾が活動を展開し、塾卒業生は7,977名に達しています。

これまでに、歴史探訪路の提言、路上観察ウォークラリーの実施、リサイクルイベントの開催、ゴミの減量化活動、塾人材ネットワークの中からプリペイド会社の設立などの成果が生まれたほか、現在も積極的に活動を継続している塾もあります。

● 主な卒業塾の活動状況

紅塾…「女人伝ウォークラリー」の開催

長崎くんち塾…くんちデータベースの作成

国際交流塾…「地球館」の運営、外国人・留学生との交流事業

生ゴミシェイパーズ塾…生ゴミ堆肥化の普及活動

伝統工芸塾(銀細工、現川焼、長崎刺繍、長崎の染め、ステンドグラスの5塾)…歴史文化博物館の体験工房で活動

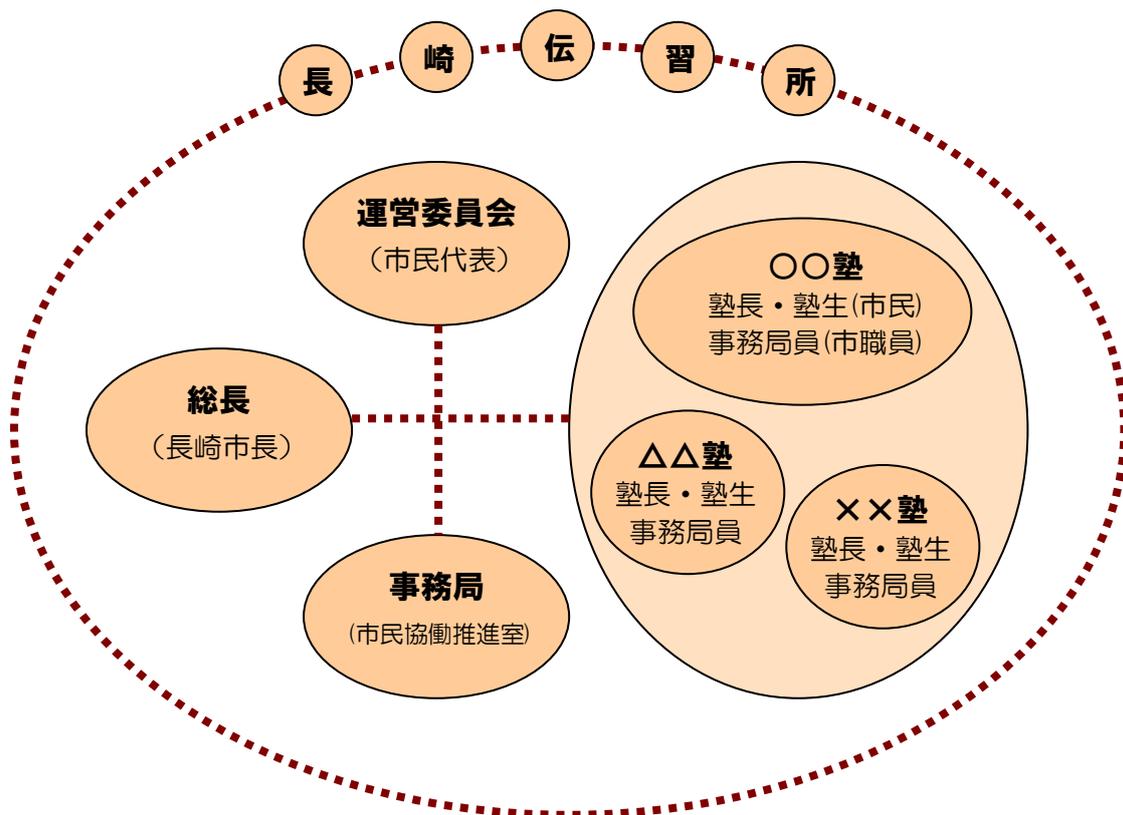


「塾」とはこんな場所

「塾」といっても、誰かに教えてもらうところではありません。市民の皆さんから長崎のまちづくりにつながる企画や塾長を公募し、運営委員による審査会を経て、「塾」を設置。その趣旨に共感、共鳴する市民の皆さんが集まり、調査研究やイベント、実践活動など様々な活動を展開しながら、魅力的なまちづくりを進めていこうというものです。

運営体制

塾テーマの選定から、塾の運営まで、すべてを市民自らの手で行うのが、長崎伝習所の特色です。



- 塾 …………… 市民が主体となって、自主的、自律的に活動する場
 - 塾長 …………… 塾運営の責任者
 - 塾生 …………… 塾のテーマに基づき活動する参加者
 - 塾事務局員 …… 塾と行政とのパイプ役になる市職員
- 運営委員会 …………… 設置する塾の審査や塾の活動内容等についてのアドバイス等を行う機関



「塾」活動の流れ

12～1月

塾テーマ・塾長 募集

市民の皆さんから「塾」活動企画を募集

塾長候補者が応募用紙に設置目的、研究・活動内容、対象塾生、塾開催運営方法、成果品内容、連携したい部署、予算などを書いて応募。



2月中旬

審査会

運営委員による審査会で新年度活動塾を決定

塾長応募者からのプレゼンテーションで審査により決定。



継続申請（2年目）

塾活動は単年度事業が原則ですが、2年目の活動を継続する場合、継続申請し、運営委員会の審査を受け、継続を決定。

4月

塾生募集

広く市民に呼びかけ、塾生を募集

塾の趣旨に共鳴、共感し、一緒に活動する塾生を募集。4月下旬に塾生を確定。



5月

開所式

塾生が一堂に会し、塾活動をスタート

塾長と塾生の初顔合わせの開所式を開催。開所式後に第1回塾会議を行い、連絡網や役割分担、集まる日や場所等を決め、塾活動開始。



11月

中間報告会

塾の活動状況を運営委員会に報告

塾の活動を運営委員会に報告し、以降の活動へのアドバイスを受ける。



3月

長崎伝習所まつり

各塾の活動の歩み・成果を広くアピール

塾活動の成果を広く市民の皆さんなどに知っていただくために長崎伝習所まつりを開催。



3月

成果報告書作成

塾活動の成果・提言をまとめた成果報告書を作成

各塾の成果・提言をまとめた成果報告書を作成し配布。伝習所事務局（長崎市市民活動センター）、図書館等で閲覧できる。



卒業後

フォローアップ補助金

卒業塾の活動



卒業塾の活動支援

伝習所卒業後2年間は塾の自立促進のために設けられている「長崎伝習所フォローアップ補助金」の申請可能。運営委員による審査により交付。



自立して活動する塾